

多様なアプローチによる市民の情報行動パターンの解明

提案組織

代表者	永田治樹	図書館情報メディア研究科・教授	
共同提案者	マイヤ-レーナ・フオタリ	オウル大学人文学部情報学科・教授	
〃	歳森敦	図書館情報メディア研究科・助教授	
〃	鈴木佳苗	〃	・講師
〃	松林麻実子	〃	〃

研究目的

メディアが多様化する中で、個人がその多様なメディアをどのように使い分けるか、どのような情報を獲得しているか、という情報行動の多様性が重視されるようになりつつある。「情報行動」は一般に「情報メディアを媒介として情報を授受・加工・生産・蓄積するメディア利用行動」および「主に言語信号を授受する直接的コミュニケーション行動」と定義される。本研究プロジェクトでは図書や雑誌等の伝統的な紙メディアだけでなく、多様なメディアの、とくに利用の側面を「情報行動」として研究対象とする。

本研究では市民の情報行動パターンの解明、地域差やリテラシーなどの個人差が行動パターンに及ぼす影響の解明を軸に、個人の情報行動を対象とする多様な研究の展開を期待するものである。また、このように把握できる情報が社会的資産としてどのように位置づけられるかについても検討していきたい。

研究成果

この種の研究は、理論的な整理と実証的な研究との両面から展開されるべきものとして、本研究でも双方の試みが行われた。

とくに理論的な整理のために、2006年2月にフィンランドから共同提案者フオタリ教授に加えてタンペレ大学のレイヨ・サボライネン教授を招聘し、また学内外の研究者を交えてワークショップを開催した。フオタリ教授からは、ナレッジマネジメントの観点から情報行動に対する問題提起がなされ、またサボライネン教授からは、認知主義な指向の強いいわゆる情報行動論に対して、人々の日常の情報に対する社会的コンテキスト（したがって図書館等の社会基盤への関わりも視野に入れられる）を踏まえた「情報実践」の概念が提起された。

実証的な研究としては、一般の人々による図書館利用やメディア利用が日常生活や彼らの経験とどのように関わっているのかという社会的観点からのインタビュー調査、住民調査を行った。また、市民の図書館利用とライフスタイルや選好意識との関係を探るなどの調査を実施した。それに少しアспектとは違うが、小学校における読書活動についての調査も加えた。

以下に、それぞれの概要を記す。

1. フィンランドからの研究者招聘とワークショップ

本総合研究の一環として、共同研究者であるマイヤ-レーナ・フオタリ教授（フィンランド・オウル大学）と情報行動研究の第一人者であるレイヨ・サボライネン教授（フィンランド・タンペレ大学）の2名を招聘し、「図書館を取り巻く環境を理解する（Understanding the Library Environment）」と題した講演会およびワークショップを開催した。本講演会およびワークショップの目的は、近年国際的に注目されている図書館情報学研究への社会構築主義的観点の導入を早い段階から説いている研究者を招聘し、日本の研究者と意見交換を行うことを通して、筑波大学に日本の情報行動研究の拠点を形成することにある。

2006年2月27日(月)に筑波大学春日キャンパスにおいて、「組織と個人の情報行動との関係を考えるー情報行動研究に対する社会学的視点の導入ー」と題したワークショップを開催した。

サボライネン教授には「日常的情報実践の構築」、フオタリ教授には「日常の情報探索行動を用いた組織行動の説明：理論の構築をめざして」という題目で情報行動研究および組織研究における方法論的側面に焦点をあてた研究報告を行ってもらった。最近従事している研究を具体的な事例としてあげながら、理論的枠組やそれを実現する方法論について多くの研究成果が示唆された。

その後、彼らの講演内容をもとにしたディスカッションを行い、その中で日本の状況も報告された。情報行動研究の第一人者である田村俊作教授とエスノメソドロジーを使った組織行動の研究で多くの成果を挙げている池谷のぞみ氏の2名を中心に、フロアの参加者も交えて、意見交換が行われた。サボライネン教授の提唱する「日常的情報実践」とアルフレッド・シュッツの理論や専門用語との関連性について、フオタリ教授の情報探索行動を用いた組織研究という視点がこれまでの図書館情報学に存在しなかったことなどについて、議論が行われた。

講演会については、2006年2月28日(火)に筑波講演（筑波大学春日キャンパス）、同年3月3日(金)に京都講演（同志社大学寒梅館）を行った。

今日的な状況において、図書館は実に多くのことを要求されている。その中でもとくに図書館が自らの置かれている環境を理解し、社会に対して自らの存在意義を示すことだといえる。ここでは、利用者や親機関などの図書館を取り巻く環境を理解し、図書館を効果的な存在として位置づけるために必要な視点について、サボライネン教授には「日常生活における情報実践の構築」、フオタリ教授には「大学における組織的な連携：知識プロセスの観点から」と題した講演を行ってもらった。

筑波講演では、本学開講「情報行動論」「学術情報行動論」の受講生を中心としながら、情報行動や大学図書館・学術情報流通等に興味を持つ学生および研究者の方々を対象に、京都講演では大学図書館員の方々を対象に、少し図書館の現場に近い実例などを紹介しながら、それぞれ講演を行った。具体的には、サボライネン、フオタリ両教授に自らの行っている情報行動研究および組織研究の成果が「図書館」という具体的なフィールドにおいていかに応用されるかということについて論じてもらった。

ワークショップについては、本研究科の教員および大学院生を中心として、外部の研究者、図書館員などを含めた30名ほどの参加があった。講演会については、筑波講演は本学図書館情報専門学群の学生を中心に80名程度、京都講演は関西地区の大学図書館職員を中心に30名程度の参加があった。

なお、ワークショップおよび講演会の記録は、研究成果に示した本報告のほか、図書館情報メディア研究科のウェブサイト (<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/rp0506>) にワークショップに使ったパワーポイント資料と、両教授が使用した講演原稿（および関連文献）の翻訳を掲載した。

2. 実証的研究

2. 1 ライフスタイルと図書館利用に関する調査（永田治樹・坂井華奈子・川合哲也）

市民生活において図書館は重要な情報源である。しかし近年、情報化の進展や人々のライフスタイルの変化によって、図書館の利用に関してさまざまな変化がみられるようになっている。そこで、人々のライフスタイルを探るとともに、日常の情報の獲得行動、さらに図書館や読書・学習の行動のあり方など総合的な把握を試みた。

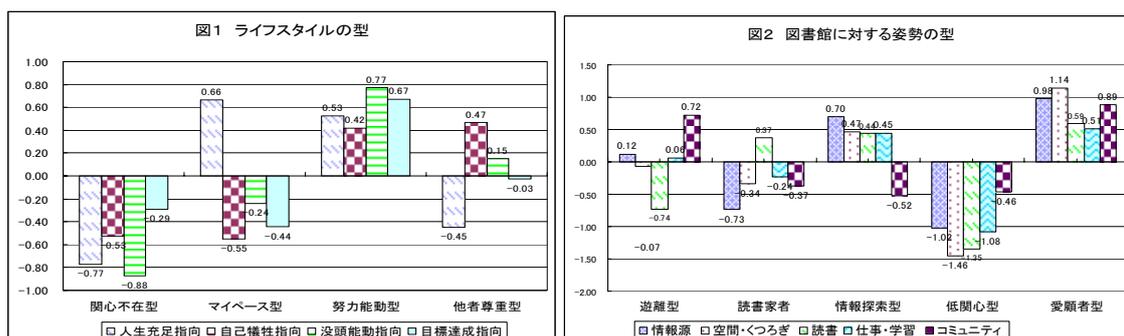
本研究では、これまで次のような調査を実施した。

- (1) I 県南部の都市化の進展した A 地域における、人々のライフスタイルと図書館利用の関係を検討するための質問紙調査（市立図書館から半径 2 キロ以内の地域の住民（抽出）を対象）
- (2) 同 A 地域の同一の図書館と、同じように都市化した他の B 地域の図書館における、ライフスタイル、日常の情報の獲得行動、図書館や読書・学習の行動のあり方に関する質問紙調査（来館者対象）

なお、(1) と (2) の調査は、別の時点である。また、②の調査においては、A 地域の図書館は、70 年代末に竣工した、いわば情報化以前の一般的な公共図書館のサービス様式をとっているもの、B 地域の図書館は、2003 年に竣工したもので、情報化に対応したサービス様式をとっているものである。

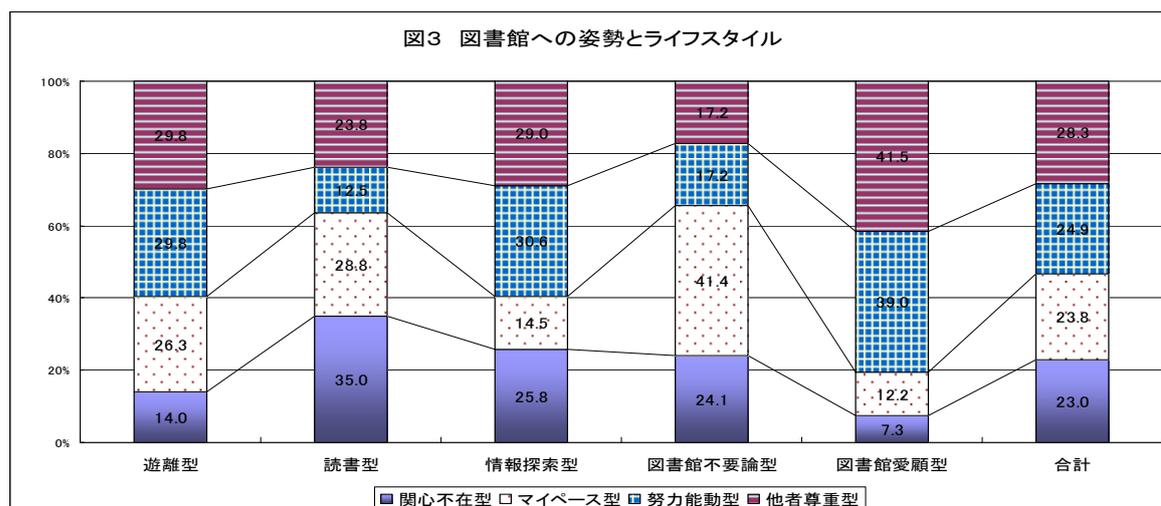
(1) の調査の結果から、次のような知見が得られた。

ライフスタイルに関する 12 の質問項目の因子分析の結果、自己充足指向、自己犠牲指向、没頭能動指向、目的達成指向の 4 因子（図中の棒が左から順に対応する）の組み合わせから、住民のライフスタイルとして、①関心不在型、②マイペース型、③努力能動型、④他者尊重型が抽出できた（図 1）。他方、図書館に対する住民の姿勢の類型は、24 の質問から、情報源、空間・くつろぎ、読書、仕事・学習、コミュニティの五つの因子（同じように図中の棒と対応する）の組み合わせから、①遊離型（図書館を平均的に利用してはいるが、関心そのものは高くない層）、②読書家型（読書はするが、図書館を利用しない層）、③情報探索型（図書館を情報を得る場所と認識している層）、④低関心型（図書館に関心を示さない層）、⑤愛顧者型（図書館によいイメージをもっており、もっとも図書館を利用する層）の五つの型が見出された。



ライフスタイル別に図書館に対する姿勢の類型の平均因子得点には有意差がみられた。関心不在型は、読書に対して因子得点はプラス、他はマイナスで、本を読むことはあるが、図書館を利用はしないと推定でき、マイペース型は、すべてにマイナスであり、ほとんど図書館を利用しないと思われる。努力能動型は、読書の因子得点は低いが、他はプラスで、図書館をよく利用するだろう。また、他者尊重型は情報源では低い値のプラス、空間や読書・学習では高位のプラスであり、図書館においての読書・学習を好むと推定される。

ライフスタイルと図書館に対する姿勢をクロスしたものが図3である。



さらに分析をより洗練するとともに、(2)の調査の分析をまとめ、別に報告する。

2. 2 市民の情報行動特性と図書館利用の選好意識 (歳森敦・後藤崇志)

図書館がどのようなサービスを提供すればその魅力が向上するかは、図書館利用の多様性もあって個人差が大きい。本研究では、図書館利用に関する市民の選好意識の差異とメディア利用などの情報行動特性との関係を検討した。

選好意識の測定にあたっては、「資料の品揃え」「インターネットから使える機能」「開館時間の長さ」「力を入れているレファレンスサービス」「力を入れている滞在空間」の5種のサービス要素について、それぞれ異なるサービス水準が設定された2つの仮想的な選択肢から、利用したいと思う図書館を選択する行為を通じて、選択型コンジョイント分析を行った。調査は

千葉県成田市の市民 1,000 名に対して郵送で実施し、276 名の有効回答を得た(回収率 27.6%)。

最初に、ベイズ推定を用いて個人別の選好意識を推定する方法で、回答者を選好意識のパターンから類型化した。その結果、3つのクラスターに分類され、それぞれ仕事利用型(1)、読書利用型(3)、生活利用型(2)の集団として特徴づけることができることを示した。仕事利用型のクラスターは回答者の半数以上を占め、専門書・参考図書の提供や電子的レファレンス、夜間までの開館、仕事・勉強上の調べものへの支援を強く求める傾向を示している。読書利用型のクラスターは仕事利用型の選好と反対の指向を持つが、夜間までの開館を求めている点は共通している。生活利用型のクラスターは個人的な興味関心事に対する調べものの支援や児童書の充実に関心が高く、夜間の開館に関しては相対的に要求が低い(図左)。

次に、情報行動特性として、メディア利用の面からは、書籍、テレビなどの伝統的メディアの接触時間の長短は、図書館利用の選好意識に有意な差異を生じないこと、一方、インターネット利用の有無は「専門書」(この逆指標としての「児童書」)、「21時までの開館」、「情報機器の提供」「作業席の提供」の部分効用値に対して有意差があることが示された(図右)。

結論としては、①仕事利用型、読書利用型、生活利用型の3つのパターンが存在すること、②書籍、テレビといった伝統的メディアへの接触量からは選好意識の差異が生じていないこと、③インターネット利用者は仕事利用型と類似の選好意識があることが示された。

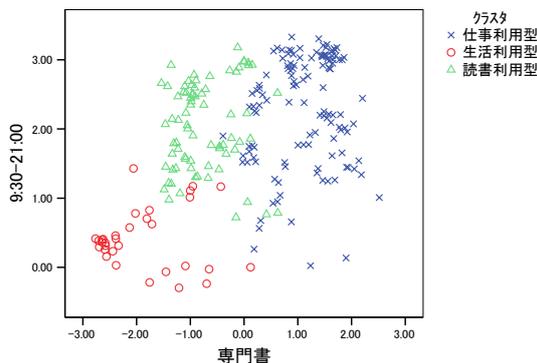


図 部分効用値の分布 (専門書×21時まで開館)

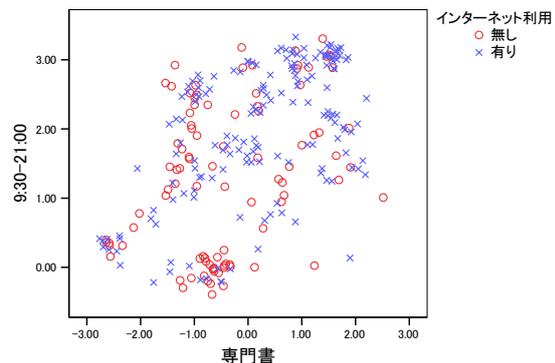


図 インターネット利用・非利用による選好の差異

2. 3 小学校における読書活動の実践に関する調査 (鈴木佳苗・岡見知穂)

本研究では、読書活動を「一斉読書、授業時間内の活動など本に関するすべての活動」と定義し、先進的な読書活動を行っている小学校を対象として、子どもたちに対する読書活動の実態と読書活動への子どもたちの反応や読書活動の影響に関する現場の実感を調査した。

調査は、平成 16 年度に読書活動優秀実践校として表彰された全国の小学校 (99 校) を対象とした。回答学校数は 20 校、回答教員数は 86 名であった (回収率 20.2%)。調査では、(1) 実施しているもしくは実施したことのある読書活動、(2) 最も力を入れている読書活動の具体的内容、(3) 最も力を入れている読書活動の実施頻度、(4) 読書活動の工夫点とそれに対する子どもたちの反応、(5) 子どもたちの反応とそれらの原因と考えられる読書活動、(6) 読書活動

の悪影響などについて尋ねた。以下では、それぞれの結果について報告する。

(1) 実施しているもしくは実施したことのある読書活動

最も多かったものは、「読み聞かせ」であり、続いて「一斉読書」「個別読書」「ブックトーク」の順番であった(図1)。

(2) 最も力を入れている読書活動の具体的内容

朝始業前10～15分で一斉読書を行う活動が多く、また、「あいた時間に読書するように指示をする」といった内容が挙げられ、読み聞かせについては、週に1回、月に1回など保護者や教師などによる読み聞かせを行っているという活動内容が挙げられた。ブックトークについては、年に数回や、図書館司書によるブックトークを行うといった活動が挙げられた(図1)。

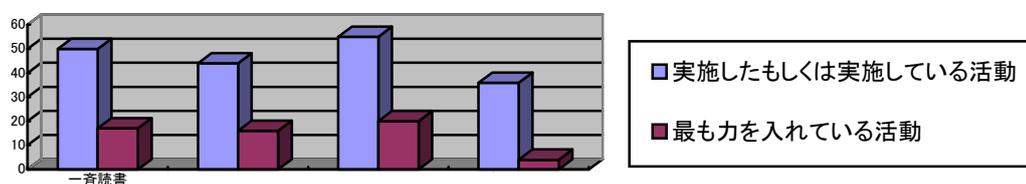


図1 実施している読書活動と最も力を入れている読書活動

(3) 最も力を入れている読書活動の実施頻度

最も力を入れている読書活動の実施頻度は、最も多かったものが、「毎日」であり、続いて「週に1回」であった。

(4) 読書活動の工夫点とそれに対する子どもたちの反応

環境面において「図書室のおすすめの本」、読書指導面において「机の中に必ず1冊の本を置く」「教師も本を読む姿を見せる」、活動面において「保護者による読み聞かせ」など、様々な工夫点が挙げられた。また、それらの工夫された活動に対し、子どもたちは「意欲的」「楽しんでる」といった反応が見られるということであった。

(5) 子どもたちの反応とそれらの原因と考えられる読書活動

子どもたちに見られた反応について最も多く挙げられたものが、「自分で本を選ぶ」であった。「友達と共通の話題を持つ」「読書量が増える」「落ち着く」といった反応についても多く挙げられた。

(6) 読書活動の悪影響

「特になし」という回答が多かった。その他、「悪影響が見られたとしても、目が悪くなる、姿勢が悪くなるといったものくらい」という意見が数名から挙げられた。

2. 4 日常生活における情報行動と行為者の社会的側面に関する研究 (松林麻実子)

人間の情報行動を社会的な行為としてとらえ、それを社会的な役割やアイデンティティとの関係から解釈しようとする研究は、これまで各種の専門職(研究者や弁護士、医療関係者など)とのからみで行われてきた。その結果として、専門職に従事している人々は情報行動を重視す

る傾向にあり、彼らの専門職としてのアイデンティティを情報行動に見出す例も少なくないことがわかっている。

本研究では、日常生活における情報行動も同様の観点から解釈できるのではないかという問題意識に基づき、研究の第一段階として、一般の会社員が日頃行う情報行動の全体像と彼(女)がそのような行動を起こす理由の二点を明らかにすることを試みた。量的分析を行う前段階として位置づけたため、1名の会社員を被験者とし、特定の一週間における彼の行動を観察し、その観察結果を基にインタビューを行うという手法をとった。

結果として、一般の会社員においては、娯楽のための情報行動と社会生活を送るために必要な情報行動という2種類の行動が見られ、それは時に一体化する傾向にあることがわかった。そして、テレビのニュース番組を毎日チェックする、時間をかけて新聞を読むなどの情報行動に関しては、仕事や日々の生活に直接関係しないジャンルの情報でも、社会人として存在するために“世の中で何が起きているのかを知っておかなければならない”と考えているからこそ、入手しようとしていることが明らかになった。この結果は、社会人が日常的に行う情報行動についても、専門職従事者にとっての情報行動と同様に社会的行為として位置づけることが可能だということを示唆している。

今後は、社会人が日常的に行う情報行動がどのような社会的役割や集団と関係しているのかということについて、量的な枠組を念頭において研究を進めていく必要がある。

成果発表

- ・『図書館を取り巻く環境を理解する』（平成17年度筑波大学大学院図書館情報メディア研究科総合研究「多様なアプローチによる市民お情報行動パターンの解明」報告書）同研究科，2006.3, 111p.
- ・松林麻実子「情報行動研究における方法論的検討：図書館利用者調査との接点」『2006年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱』日本図書館情報学会，2006.5, p.75-78.